安田教育研究所

安田理　氏

「平成 28 年度　中学入試の動向」

2016 年度中学入試はどう行われたか

安田教育研究所
安田　理

全体の状況

●首都圏中学入試の全体的な流れ

入試年	小学校卒業生数	募集定員	受験者数	受験率
2016 年	296,800	44,161	47,000	15.8
2015 年	300,400	44,276	46,500	15.5
2014 年	303,000	44,521	47,000	15.5
2013 年	305,000	44,632	49,500	16.2
2012 年	305,000	44,520	52,500	17.2
2011 年	307,000	44,247	54,000	17.6
2010 年	303,000	43,806	54,000	17.8
2009 年	303,000	42,636	54,000	17.8
2008 年	296,000	41,932	52,500	17.7
2007 年	307,000	41,756	52,000	16.9

久々に受験者数増、受験率もアップ

上記の表は四谷大塚が推定している数字だが、他の 2 社も 2016 年度入試では下記のように受験者数が増加したとはじいている。

○首都圏模試　43, 700 人（前年 43, 200 人）
○日能研　　56, 400 人（前年 55, 600 人）（公立中高一貫校のみ受検者を含む）

首都圏の小学校卒業生数が前年の 30 万 400 人から 29 万 6800 人へと 3600 人ほど減ったので、リーマンショック以降下がり続けていて受験率も 15.5%から 15.8%へと 0.3%もアップした。これに公立中高一貫校のみを受検したと思われる人数を加えると、5.6 万人くらいになり、受験率は 18.9%と、5～6 人に 1 人が中学受験したことになる。

受験者数が増えた背景としては、2020 年から大学入試が大きく変わることが大きいと

思われる。具体的にどうなるか、まだ不透明な部分が多いが、「知識・理解型」の入試から、そうしたものの「活用型」、さらには「思考力・判断力・表現力」が重視される方向へと動くことは間違いない。そうなると6年間ある中高一貫校のほうが有利なわけで、そうした点を考えた保護者が多かったということだろう。

また、このところ「グローバル化」「グローバル人材」ということが盛んに言われるようになっている。わが子がこれから巣立って行く社会を考えると、中高時代から海外の人と交流する経験を持たせたいと願う保護者が確実に増えている。そうした経験ができる場となると、やはり私立中高一貫校となる。

中学進学率が高いのは中心区

次に実際の中学進学率を見てみよう。都が調査した2015年度の数字だが、地元の公立中学でなく外部に進学した割合が高い区・市は下記のようになっている。

○都内の外部（私立+国立+公立中高一貫）**進学率**

男子17.5（前年16，8）%、女子19.4（前年19.1）　%

○外部進学率の高い地域

・区部　千代田区、中央区、文京区、港区、世田谷区

・市部　武蔵野市、三鷹市、調布市、国立市、国分寺市

○公立中高一貫校進学者の多い地域

・区部　練馬区、世田谷区、江東区、千代田区、杉並区

・市部　八王子市、三鷹市、西東京市、府中市、調布市

2016年度入試、急速に多様化が進む

○さまざまな入試が登場、保護者の学校選択も多様化

入試面でいうと、さまざまなスタイルの入試が登場して、急速に多様化が進んだことが最大の特徴だった。適性検査型・思考力テストといったタイプの入試を実施した学校が86校、何らかの形で英語入試を実施した学校が54校にも及んだ。2016年は大きく変化した年と言えそうだ。

まず主な変更点を挙げておこう。

- **新設**　千葉県立東葛飾、埼玉に本庄第一
- **共学化**　法政大学第二
- **系属化**　横浜英和女学院が青山学院大学の系属校に。2018年共学化
- **入試日程**　桐朋　2月2日にも、光塩女子学院　2月1日にも、日大三2月3日に新設

これまで入試回数は増やす一方だったが、2016年度入試では、鷗友学園女子、公文国際は3回を2回に減らすなど、入試回数を減らす動きも生まれた。

- **英語入試さらに増加**　佼成学園、大妻中野、女子聖学院、東京女子学園、トキワ松学園、山脇学園、駒込、城西大城西、目白研心、安田学園、関東学院六浦、横浜隼人ほか多数
- **適性検査型さらに増加**　佼成学園、小野学園女子、東京女子学園、相模女子大学、聖ヨゼフ学園、横浜富士見丘学園、立正、横須賀学院、横浜隼人ほか多数
- **思考力テスト及び大学入試改革を意識した入試も増加**（以前からの実施も含む）聖学院、共立女子、光塩女子学院、品川女子学院、十文字、富士見丘、かえつ有明、工学院大学附属、聖徳学園、二松学舎大学附属柏
- **そのほかさまざまなスタイルが登場**　ポテンシャル、リベラルアーツ、一能一芸、志、自己決定・・・名称からは中身が分からない入試が急増

そうした中では、後で述べるが、

・多くの付属校が応募者を増やしたこと

・グローバル化社会をにらんだ教育をしていることを強調している学校が人気だったこと

・帰国生が多いなど英語力を伸ばせそうな環境にある学校が選ばれたこと

などが全体的な傾向として挙げられる。

一方、従来からのしっかり学力をつけて難関大、医学部へ進学してほしいと願う保護者も依然として大勢いた。「特進コース」的なコースで志望者増となったところも多数あった。

ここからは、そうした2016年度入試の特徴を例を挙げながら見ていこう。

○難関校の動向は学校によって異なる

入試を分析する場合、よく「安全志向」の年だったとか、「チャレンジ志向」の年だっ

たとかいう言い方をする。が、2016 年度入試は男子校でも、女子校でもそうした言い方でくくるのが難しい年だった。難関校は軒並み応募者が増えた、減ったということが言えない入試であった。

男子校でいえば、海城、攻玉社、芝、桐朋、武蔵、浅野、サレジオ学院などは増えたが、駒場東邦、城北、早稲田、栄光学園、逗子開成などは減らした。麻布、開成、本郷、聖光学院などはほぼ横ばい。

男子校ではずっと2月1日のみだった桐朋が2日にも入試を構えたことが大きな話題で、実際2日の男子校の応募状況に影響を与えた。

女子校も似たような傾向で、大妻、吉祥女子、豊島岡女子学園、洗足学園、フェリス女学院、浦和明の星女子などが増えたのに対し、桜蔭、学習院女子、女子学院、雙葉、立教女学院、横浜共立学園などは減らした。

鷗友学園女子が入試を3回から2回に減らしたことが、難関校の2日と4日の動向に大きな影響を与えたことも今年の大きな特徴だった。

したがって、全体にどうこうというよりは学校ごとの事情によって増減したというのが2016年度入試の傾向である。

○共学校は新しいタイプに集まる

共学校では渋谷教育学園渋谷、広尾学園、山手学院、開智など従来からの人気校が大きく増やしたほか、グローバル化社会対応型教育を強く打ちだしている開智日本橋学園、三田国際学園が 2015 年に引き続きさらに増やしたほか、やはり生徒が巣立つ先を意識した教育をしている東京都市大学等々力が大幅増となった。「偏差値、大学合格実績よりも、将来につながる力を付けてくれそうな学校を選ぶ」という保護者が確実に増えている。

このほか男子校だった法政大学第二が共学化し、女子にも大人気だった。

○付属校志向、特に男子で強く出る

顕著な傾向としては先に述べたように付属校の多くが応募者を増やしたことが挙げられる。学習院、立教池袋、慶應普通部、立教新座といった男子校、青山学院、慶應中等部、中央大学附属、法政大学、慶應湘南藤沢など共学校での増が目立った。

このほか今年の特徴は、日本大学豊山、日本大学第一、日本大学第三、日本大学と、日本大学の系列校が軒並み増えたこと挙げられる。

今年の付属校志向は、不透明な大学入試改革を敬遠したと同時に、ここへきて注目され出したアクティブラーニングに関しては付属校は以前から豊富な経験の蓄積があることも影響していると思われる。

■付属校受験者数　前年比較

太字は前年より受験者増を示す

学校名	募集人数	16年 受験者数	15年 受験者数
男子校			
学習院	約140	**578**	528
慶應普通部	約180	**578**	510
日本大豊山	240	**769**	584
明大中野	約240	1103	1171
立教池袋	約90	**471**	422
立教新座	約140	**1804**	1514
早稲田	300	1583	**1659**
早大高等学院	120	—	376
女子校			
学習院女子	約145	374	**477**
日本女子大附	約140	394	**481**
立教女学院	約110	324	**415**
共学校			
青山学院	男女約140	**◎743**	●518
慶應湘南藤沢	男女約150	—	496
慶應中等部	男140女50	**○1121**	**◎1080**
中央大附	男女計150	**○758**	**◎684**
中央大附横浜	男女計160	**1686**	●1226
日本大学	男女計240	**◎2167**	○1178
法政大学	男女約140	**940**	874
法政大第二	男150女60	**1416**	998
明中八王子	男女計160	●466	561
明大明治	男女約150	●951	●1003
早稲田実業	男85女40	**○514**	**◎511**

○「思考力」、「大学入試改革」がキーワード

成長が止まり、社会が閉塞状況に陥った現在、従来型のインプット中心の教育では困難な状況を打開できる人間はなかなか育たないことが問題視されている。そのため大学入試改革だけでなく、高校教育・大学教育の改革を含めた「三位一体の改革」が叫ばれているのである。こうした時代背景から中学入試にも新しいトレンドが生まれている。

例を挙げてみよう。

＜思考力テスト＞

・かえつ有明　2月1日午前　思考力テストの入試に50名が受験。2月4日午後の難関思考力特待入試に54名が受験。

＜大学入試改革を先取りした入試＞

・共立女子　　2月4日C　176名が受験

・品川女子学院　2月4日第3回　315名が出願、180名が受験

そのほか、ポテンシャル、リベラルアーツ、一能一芸、志、自己決定……名称からはどういう中身なのか分からない入試が急増した。

2016年度は新しい入試が定着した元年と言えそうである。

公立中高一貫校　大半の学校で受検者が減少

○東葛飾に1147名が受検

2016年度の公立中高一貫校の話題と言えば千葉県立東葛飾が開校したこと。受検者1147名という大人気になった。が、そのほかは大半が受検者減で、都内11校のうち小石川中等教育、武蔵高校附属の2校は受検者が増えたが、そのほかの9校は今年も減らしている。

その一方、適性検査当日の欠席者、合格後の辞退者が増えており、私立も受験している受検者が増えていることがわかる。因みに都立10校の当日の欠席者は、男子が163名（前年157名）、女子が200名（前年183名）の計363名（前年340名）と、男女とも前年より増えている。同じく都立10校の合格後の辞退者は男子が47名（前年43名）、女子が55名（前年41名）の計102名（前年84名）とこれまた増えている。

他の3県では、受検者が増えた学校は1校もない。それでも神奈川県立相模原中等教育、横浜市立南高校附属など大学合格実績を伸ばしているところは1000名を超える受検者がいた。ただ受検者は減っても、各校とも難度は上昇しているので、十分な準備はこれまで以上に必要だ。

○今年は5校で男子が多くなる

公立中高一貫校の受検者は女子のほうが多いことがふつうだが（川崎市立川崎高校附属

は男女別の数字は公表していない）、例年男子のほうが多い小石川中等教育、武蔵高校附属、県立千葉に加え、今年は相模原中等教育と新設の県立東葛飾も男子が多くなっている。

■2016 年度公立中高一貫校　受検者数　前年比較

学校名	募集人数	2016 年	2015 年
＜東京＞			
桜修館中等	男 80 女 80	1006	1081
大泉高附属	男 60 女 60	839	862
小石川中等	男 80 女 80	**929**	826
立川国際中等	男 65 女 65	701	805
白鴎高附属	男 80 女 80	948	997
富士高附属	男 60 女 60	569	612
三鷹中等	男 80 女 80	1039	1110
南多摩中等	男 80 女 80	876	874
武蔵高附属	男 60 女 60	**564**	**557**
両国高附属	男 60 女 60	971	998
区立九段中等	A 男 40　A 女 40 B 男 40　B 女 40	762	910
＜神奈川＞			
相模原中等	男 80 女 80	1009	1102
平塚中等	男 80 女 80	746	749
横浜市立南高附属	男 80 女 80	1219	1250
川崎市立川崎高附属	男女計 120	542	580
＜千葉＞			
県立千葉	男 40 女 40	785	909
県立東葛飾	男 40 女 40	1147	
千葉市立稲毛高附属	男 40 女 40	630	**734**
＜埼玉＞			
県立伊奈学園	男女計 80	425	534
さいたま市立浦和	男 40 女 40	447	486

＊14 年、15 年受検者数の欄の**太字**は前年より受検者増を示す。

＊小石川中等、立川国際中等、白鴎高附属は「特別枠」がある。

国立大学附属の多くは受験者が減る

公立中高一貫校が次々に開校する一方、国立大学附属はこのところあまり注目されなくなっている。2016年度も多くの学校で前年より受験者が減少している。

増えたのは筑波大学附属駒場、東京学芸大学附属国際中等教育、東京大学附属の一般、横浜国立大学附属横浜、埼玉大学附属くらいである。このほかではお茶の水女子大学附属の男子が増えているくらいである。

年々広き門になってきているので、2017 年度も国立大学附属はねらい目となりそうである。

なお横浜国立大学附属鎌倉は2017年度から小中一貫校になる予定。